●管理釣り場編

両ダンゴのチョーチン釣り

最近の傾向

「型がイイネ!」「すごい引きだよ!」などのダイナミックな釣りが楽しめるのが両ダンゴのチョーチン釣り。

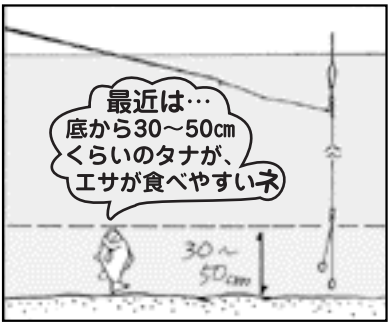
基本的に管理釣り場でチョーチン釣りをすると、どのタナでもウキは動くが、その中でいかに大型が、また食い気のある魚が多くいるかを見極めなければならない。まずは、この釣れる、釣りやすいタナを見つけることが大切だ。

最近のエサの傾向としては、軽いエサのほうがよいということが言える。特に日曜日などの混雑時ではかなりの差が出る。ひとことで軽いといってもボソのバラケ性が良いものではない。どちらかというとネバリがあり、糸を引くようなバラケ方をするイメージ。

逆に平日や空席が目立つときは、状況次第だが重めのエサも必要となる。その中でも今流行のペレットエサをブレンドしたものも見逃せない。

これがエサの特徴だが、これだけで釣れるほど簡単な釣りではない。ウキは動くが、決めアタリが出ない。出ても食ってくれないなど…。ここをクリアするにはエサ以外に、ハリスワーク、ハリの号数、ウキが重要になってくる。

ベストセッティングを構成する要素は、エサが半分、ハリス、ハリワークで30%、ウキワークで10%、ロッドワークで10%と分けられるだろう。その、どれかがズレるとなかなか決まらないのが現状。例えエサが十分だとしても、それだけでは正解の半分でしか



ない。エサ、ハリス、ハリ、ウキと全てをチェックしていけば、何かが違っているのに気づくはずだ。

この釣りは、その日、その時、その釣り場で変化する。だから、釣り人が魚に合わせて対応したい。おかしいなと思ったら、思いつく限りのことを試してみよう。

パターン1 打ち始めのサーチベイト

グルバラ400cc＋水200cc＋バラケマッハ400cc

＋

＋

●エサ使いのコツ

「グルバラ」400ccに水200ccを入れ、かき混ぜる。そこへ「バラケマッハ」400ccを入れ、全体に水がいきわたるように混ぜる。「バラケマッハ」を後で入れるのは、ボソっ気を出すため。

通常まずこのパターンからスタートし、その日の釣況を探るのにおすすめ。エサ持ち、エサのバラケ性ともに良く、狙ったタナまでしっかりとエサを持たせることができる。「グルバラ」と「バラケマッハ」の量でエサの重さを調整できるので、食い気のある魚がいるタナや食いの良し悪しをキャッチしやすい。

また混雑時に、周りの釣り方がバラエティに富んでいるときや、浅ダナ釣りが多いようなとき、食い気のある魚をタナに集めやすく、しかも、エサの開きで食い気のない魚を寄せすぎない。どちらかというとしっかりウキをなじませ、ドスンという力強いアタリに的を絞ろう。

エサの大きさ

●エサのサイズ
直径2.5cm

8尺チョーチンのオモリ量

ウキ●ボディ15cm
オモリのサイズ●
0.25厚mmの板オモリ1.7cm×2個

パターン2　軽くて粘りのあるタイプ

グルバラ200cc＋粘力スプーン1杯＋水200cc＋GTS200cc＋スーパーD400cc

＋

＋

＋

＋

●エサ使いのコツ

「グルバラ」200cc、「粘力」スプーン1杯に水200ccを入れてかき混ぜる。そこへ、「GTS」200ccと「スーパーD」400ccを入れて30回ほどかき回す。軽くてバラケる「スーパーD」、重さのある「グルバラ」、その中間的存在の「GTS」とバランスのとれたブレンドを「粘力」のネバリでまとめる。

今年のヒットパターンである軽めでネバリのあるブレンド。特に混雑が予想される池や大型中心の釣り場など、多少難しさがあるようなときに有効である。

周りの釣り人も同じ攻め方をチョイスしているときなど、どうしても魚の取り合いは避けられない。そんなとき効果的なのは、ゆっくりエサが落下していき、糸を引く様にパラパラとバラケるイメージ。

よってエサとハリ、共に軽くし、なおかつハリスの長さで追いを加速させる。あとは力強いアタリには小さくても手を出していこう。なぜなら渋い予想のセッティングなどでは、まずウキを動かすことが先決だからだ。

15尺チョーチンのオモリ量

ウキ●ボディ17cm
オモリのサイズ●
0.25mm厚の板オモリ1.9cm×2個

板オモリ
実寸大

板オモリ
実寸大

※板オモリを2点付けにするのは、オモリの量が増えると巻いたときに大きくなりすぎ、ミチイトへの負担が多くなったり、ハリスが絡んだりのトラブルを減らすためだ。

パターン3 重めのペレット系

ペレ道200cc＋水200cc＋軽麩400cc＋もじり100cc

●エサ使いのコツ

「ペレ道」200ccを水200ccで溶き、そこへ「軽麩」400ccと「もじり」100ccを入れてかき混ぜる。重すぎたり、ネバリが気になりだしたら、「もじり」をふた掴みくらい追い足す。

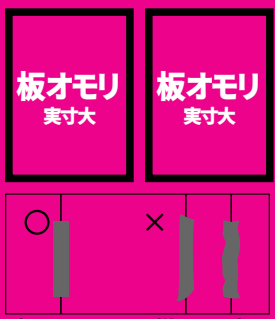
重さがあり、なおかつバラケ性も良い配合。重いエサなのでタナまでエサがたどり着くのも早い。またハリ持ちも良く、エサがハリのフトコロにきちんと残る。

寄ってくる魚に邪魔されず、早くタナまでエサを運べ、平日や非常に魚の濃い場所などには有効である。また小ベラから超大型まで魚のサイズも釣り方によって差が出るような場所でもベスト。

ウキは、太く大きめのボディー、トップも太めのパイプで、しっかりとエサを持ってくるれようなタイプを選ぶのもポイントだ。型物を狙うときや大型を揃えて勝負するときなど、ゆっくり時間をかけて釣りをする場合がベスト。時間が経つと安定感がより増すので後半がチャンス大だ。

21尺チョーチンのオモリ量

ウキ●ボディ20cm
オモリのサイズ●
0.25mm厚の板オモリ2.3cm×2個



※板オモリとハリスが絡むトラブルを防ぐためにも、きれいに巻くことを心掛けよう。

チョーチン釣りこんな時どぉする？

Q1 竿の長さ（狙うタナ）を決める目安は？

A1

竿の長さの選択は、イコール釣るタナなので重要である。まず、釣り座の水深をチェックしよう。最近は、底から30㎝～1ｍぐらい切ったラインがかなりどこの釣り場でも釣果がでているようだ。これは魚が安心しているラインなのかもしれない。

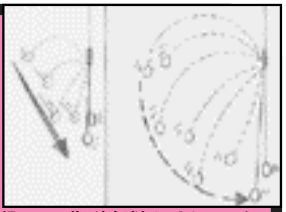
もちろん、事前に釣果の情報をしっかりとチェックして、釣れているタナを狙うのも良いだろうし、天気、気温、風などを考慮して、自分の考えを試すのもひとつの選択であるが、一日中ひとつの竿で通さず、何回か替えながらその日の釣れるタナを見つけよう。竿の変更は、2尺ずつ探るとよいだろう。

Q2 ハリスの長さはどのくらいがいいの？

A2

現在ハリスの長い釣り方がよく目に付く。チョーチン釣りには長ハリスと決まっているようだが、それにはしっかりとした考えがあってのこと。通常、50㎝を目安に入っていくのが基本。そこからサワリの強弱で判断していく。

サワリが強いときには長すぎ、逆に弱いときには短すぎと考えよう。常に1ｍぐらいまでは用意しておくとベストだ。また、ハリスについて触れておくと、太さは安心できる0.5号を目安にし、ハリスのヨレも一投ごとにしっかりと取りながら打つのも大切だ。



短ハリスは落下速度が速く、ウキへのアタリの伝わり方が速い。活性が高いときに回転の速い釣りができる。逆に長ハリスは、落下スピードが遅い分、自然なアピールができ、ウキの余計な動きが減るので、的を絞りやすい。

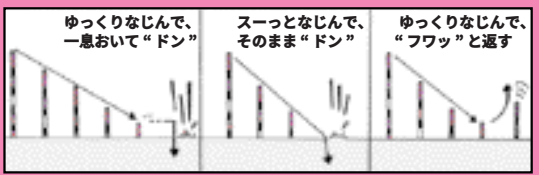
Q3 どんなアタリを取っていけばいいのかわからない

A3

基本的にはサワリが多く、なじみ幅をしっかりキープしながら力強いアタリを取っていくのがよい。ただ、落ち込みでも力強くアタるときがある。これはとりあえず合わせていくがヒット率が問題だ。毎回同じところでアタれば良いが、バラつきがあるようなら深追いは禁物。

理想的なのは、なじんだウキが一息した後、強いアタリが出るパターン。これに持ち込めばかなりの釣果が望める。

型の安定がアタリの取り方が合っているのかどうかの判断基準で、やはり深場に居る魚は魚体もきれいで重い。上層の魚とはちがいがあるのでよくチェックしよう。黄色味かかった魚ならベストといえよう。



●サワリが多くゆっくりなじみ、力強いアタリが出れば理想的だ。

●毎回同じ所でアタればよいが、深追いは禁物だ。

●1目盛くらいの返しが多いので見逃すな。

Q4 正解エサへのプロセスを教えて！

A4

エサのタッチを探る上で大切なことは、まず自分が作ったエサがハリにしっかり付いてタナまで持つかどうかだ。エサの大きさ、指圧などで同じブレンドでもかなりの違いがでる。つまりブレンドが同じでも指圧の違いで持ちすぎ、あるいは全く持たないということもあるわけだ。

次に、エサの大きさに注視したい。大きいとか小さいは水中で魚が判断する。まず、サワリの量が多い方向へ進もう。次に決めアタリ、つまり合わせられるようなアタリが出る方向。ここまで見つけて初めて釣るスタイルと言えるのだ。これをクリアして初めて、硬いやわらかいというタッチの判断、また、ボソ、ネバリといったところまで進んでいくことになる。

注意点としては、エサ合わせは少しずつが基本。一気にせず、狙ったタナに魚の食いがあると判断したらタッチを変え正解エサを探っていこう。

基本ブレンドから正解エサを探る

基本ブレンド ➡ グルバラ400cc＋水200cc＋バラケマッハ400cc
軽くするなら ➡ グルバラ200cc＋水200cc＋バラケマッハ600cc
重くするなら ➡ グルバラ600cc＋水200cc＋バラケマッハ200cc

※基本ブレンドで打ち始め、これを軽くしたり、重くしたりしてみる。そしてどちらに反応が良いかを探っていく。サーチベイトの役割である。

Q5 いいアタリでカラツン こんな時はどうする？

A5

力強いアタリでヒットしない、なじんだウキがゆっくり返してきて良いアタリが出たが乗ってこない。今のアタリで何で乗らないの？　と思わず声が出てしまうときがある。そんなとき、まずチェックすることは、エサがハリに付いているかどうか。意外と魚にもまれて、エサが無くてもウキがなじんでいる事が多い。

また、きっちりなじんで力強いアタリが出たが、空振り。深なじみしたのでエサは確かに持っている。しかし、深なじみするまでのサワリはどうですか？　意外と弱かったり少なかったりするものです。ちょっとエサを角ばらせてみてください。それからやわらかい方向へ進んでみよう。

オモリより上でのイトズレは、ミチイトがたるむので、ウキが上がることもあるゾ。食い上げ？と勘違いしやすいので注意！

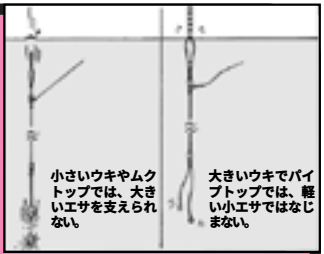
Q6 ウキの選択基準を知りたい

A6

ウキのタイプには、パイプ、ＰＣ、ムクといろいろなタイプがあり、エサの重さやネバリ、狙うタナの深さによって使い分けている。

重いエサをきちんとなじませ、タナをつくるように釣りたいとき、ムクトップでは重いエサに耐えられないので、かなり難しいエサ使いをしなければならない（トップ頭１目盛で止めるようなエサ付けは、かなり難しい）。これが、パイプトップであればエサを支えてくれるので、簡単にできる。逆に、軽いエサを追わせて釣りたいときは、スムーズな落下を演出するためにムクトップのウキが効果的。太めのパイプトップでは、抱えすぎてしまい、あまりなじまない。すると、エサを練ったり重くしたりして、軽いエサを追わせる釣りが成立しない。

このようにエサとウキが攻め方にマッチしていないと、釣りを難しく、さらにエサ使いも限定されてしまう。だから、エサとの関係を考えてウキを選ぶことが必要。また、ウキの見た目の大きさで考えるのでなく、オモリを背負う量で比較することが大切だ。まずは、負荷が大きいタイプから釣り始め、小さくしていく方が良いだろう。



小さいウキやムクトップでは、大きいエサを支えられない。

大きいウキでパイプトップでは、軽い小エサではなじまない。